論　文

長沢鼎，アメリカに生きる
—ニューヨーク州からカリフォルニア州へ

森　孝晴

1．薩摩藩米国留学生との出会い

薩摩藩英国留学生のうちイギリスに残っていた長沢鼎，森有礼，畠山義成，松村淳蔵，鮫島尚信，吉田清成の６人は，トマス・レイク・ハリスの誘いに乗り，1867年の８月頃にアメリカに移住した。この時，あまり知られていないことだが，日本各所からの留学生がすでにアメリカに来ていた。薩摩藩も，なんと英国留学生を送り出した翌年の1866年３月には第２次留学生をアメリカへと送り出しているのだ。薩英戦争以来のスピーディーな動きはまだ続いていたわけで，藩の留学生への期待の高さと派遣の有効性への確信が見て取れる。

なぜアメリカだったのかについては，いくつかの理由が考えられる。まず明らかなのは，アメリカ留学の方が経費がかからないことが第１の理由であった。今でも平均的にはアメリカの方がやはり割安である。次に留学生の世話をしてくれる人物が複数いたことがある。ハリスもその一人といえるが，ほかにもサミュエル・ブラウンやフルベッキなどがいた。さらに，世界は，イギリスの時代からアメリカの時代へと移りつつあったわけで，アメリカに関心が移るのは当然といえば当然であった。

では，薩摩藩の第２次留学生計画，薩摩藩米国留学生プログラムの全容を，ハリスの「新生兄弟社」とのかかわりにも触れながら紹介しよう。まず，藩は，第１陣として５名の学生を1866年３月28日に長崎から出航させた。その５人とは次のとおりである。

仁礼景範　35歳，海軍学専攻，のちの海軍大臣，1868年９月帰国

江夏蘇助　35歳，海軍学専攻，帰国後病死，1868年９月帰国

湯地治右衛門　23歳，農政学専攻，のちの根室県令，1871年10月帰国，

種子島敬輔　22歳，法律学専攻，1873年帰国

吉原弥次郎　21歳，政治学専攻，のちの日本銀行初代総裁，1873年３月帰国

この５人は第２次留学生計画の中の主力グループで，藩の期待は大きかった。この５人は，ロンドンを経由して，同年９月27日にニューヨークに到着した。

この後に派遣される３人を加えた合計８人がこの第２次留学生の総員だが，この８人全員が，ニューヨークに本部を持つオランダ改革派教会の宣教師サミュエル・ブラウン（横浜）と

キーワード：長沢鼎，ニューヨーク，アメリカ

フルベッキ（長崎）の仲介で留学し，ブラウンの出身校であるモンソン・アカデミー（マサチューセッツ州）に入学することになる。

第２陣は１名だけで，それは木藤市助（26歳）である。木藤は1866年７月３日に横浜を出航して同年７月末にニューヨークに到着しているが，残念ながらその後滞米中に自殺してしまう。第２次留学生の最後となる第３陣は２名だった。それは谷元兵右衛門（21歳）と野村一介（26歳）で，1867年４月下旬に横浜を出航して同年６月26日にモンソンに到着しているが，二人は帰国するブラウンに同伴したものである。谷元は1868年９月に帰国し，のちに東京馬車鉄道社長になり，野村は1871年９月に帰国し，のちに開拓使官吏である開拓大主典になっている。

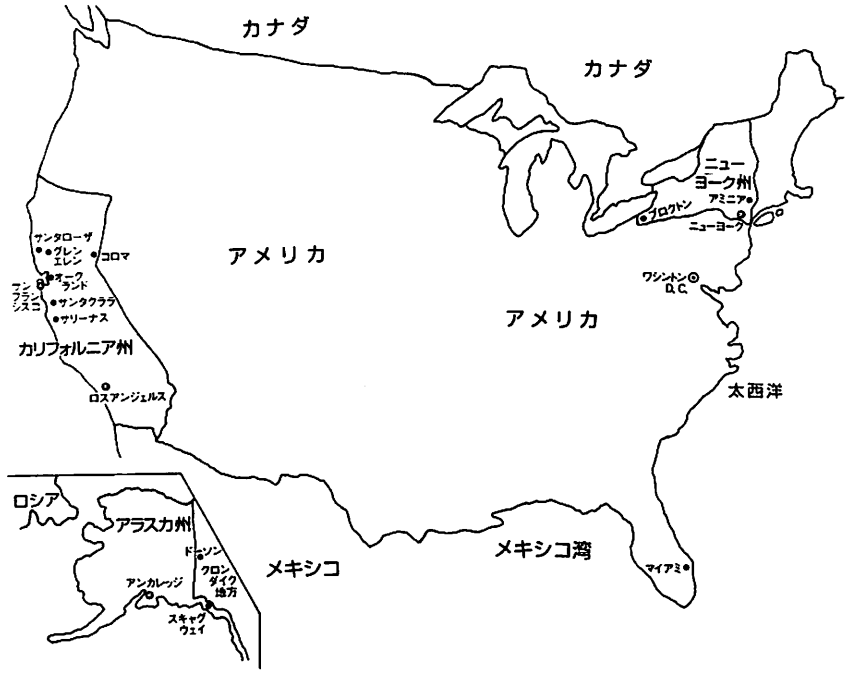
さて，したがって長沢ら薩摩藩英国留学生の６人がアメリカに渡った1867年の８月頃という時期には，すでに上記の８人はすべてアメリカにいたことがわかる。そして，９月初めにニューヨーク州アミニアに着いた英国留学生の６人がまだここに滞在していた11月末までに，仁礼，江夏，湯地，木藤，谷元，野村の６人は，「新生兄弟社」に参加している。ただし，この合流は長くは続かず，この米国留学生６人は翌1868年５月頃までにはモンソンに戻った。

その後，仁礼と江夏は，新政府の命令により同年11月末に帰国の途につき，９月には途中で谷元が合流して３人で帰国することになった。一方，野村は新生兄弟社にしばらくとどまっていたが，1871年９月に帰国した。また，湯地はマサチューセッツ農科大学で農政学を学んで，1871年10月に帰国した。

こうした動きの起こっている最中の1871年（明治４年）７月には，故国日本では廃藩置県が行われた。したがって，滞米中の留学生たちは，皮肉なことに正確には薩摩藩留学生でなくなっていた。しかし，最後の藩費留学生とも思われる21歳の青年がアメリカへと渡航している。それは，鹿児島藩貢進生として送られた田尻稲次郎である。田尻は，開成所洋学校出身（英語専攻）で，慶應義塾や開成所（東大）や大学南校で学んだあと1871年にアメリカに渡った。彼は，ニューヨークの学校やラトガース大学のグラマースクールを経て，イエール大学に進み，1878年に28歳で同大学院に進学したあと，29歳で1879年に帰国している。帰国後田尻は，帝大教授，会計検査院長，東京市長などを歴任，1880年には専修大学の前身である「専修学校」を仲間とともに作り上げた。

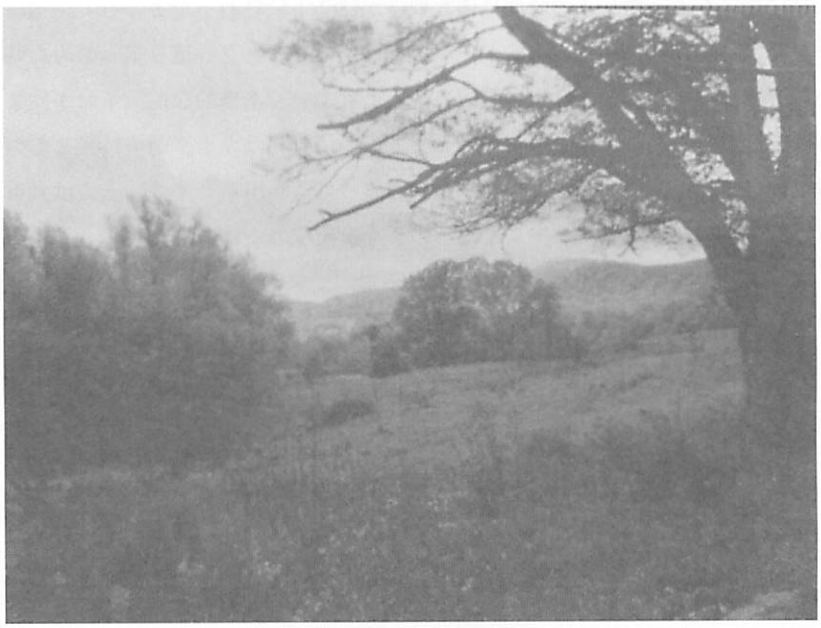
あと残りの３人については，吉原はエール大学を優等で卒業して1873年３月に帰国し，種子島は，イギリスに渡って法律を勉強したようで，1873年に帰国したが，官職には就かなかった。最後の木藤は，アメリカ生活に適応できなかったようで，1867年に異国の地アメリカで自殺している。

2．アミニアからブロクトンへ



長沢，森，畠山，松村，鮫島，吉田の６人は，ボストンに到着すると鉄道で1876年９月初めにアミニアに着いたようだ。この時期は南北戦争が1865年に終わったところで，当時の写真すらあまり多くは見られない時期であるが，アメリカがやっと自立の道を歩み始めた時期，つまりこれからアメリカを世界一の資本主義国に押し上げていく本格的な産業革命が始まろうとしている時期でもあった。ニューヨーク州はとても広い州で北はカナダ国境に接しており，大都会であるニューヨーク市マンンハッタンから橋を渡って西へ出るとすぐにそこは大自然の中となるようなところである。アミニアもまたそのような環境の中にある。

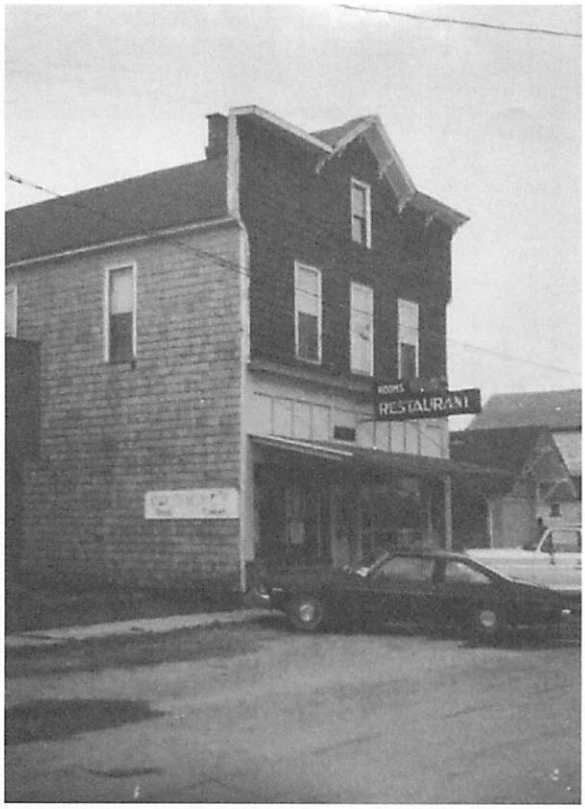
アミニアの廃線となった線路と踏み切り



アミニアのハリス農場跡

仁礼の日記によると，長沢を含む薩摩藩英国留学生の６人がボストンに着いたのは，1867年８月13日だったという。一息つくとすぐに，鮫島が代表として仁礼をはじめとする薩摩藩米国留学生のところに連絡しに行ったそうだ。９月初めにアミニアに着いてまもなくいい土地が見つかったということで，アミニアにいた人々は全員がニューヨーク州西端に位置するエリー湖畔のブロクトンに新設されたコロニーに移転した。10月末か11月の初めころから移住は始まり，12月末には留学生の６人も含めてすべて完了した。

ブロクトンもまた片田舎の町であるが，ハリスは，アミニアの土地を売り払ってここに約2000エーカーという広大な土地を購入した。彼はここを新生兄弟社の本拠としたが，この土地は肥沃で，ブドウ栽培に適した農業地域だった。ハリスには経営の才能もあったようで，彼はここで，ワイン製造のほか，レストラン経営なども行い，銀行を設立して頭取にもなった。兄弟社のメンバーはホテルや雑貨店も経営したそうだ。



ブロクトンのレストラン

ブロクトンの銀行

ブロクトンのホテル

3．ワインとの出会いと留学生の分裂

ブロクトンのヴァイン・クリフ〔「ブドウの崖」〕のハリス邸
（新生兄弟社の本部でもあり，長沢も住んでいた）

ヴァイン・クリフ

「畠山ノート」によると，ブロクトンに学校を作る話があったそうで，留学生たちには一定の期待もあったと思われる。そして，前述したように，1867年の９月下旬以降，薩摩藩米国留学生６人が英国留学生たちに合流し，特に江夏，仁礼，湯地の３人はしばらく新生兄弟社にとどまっていた。したがって，ブロクトンの新生兄弟社には一時12～13人の薩摩藩学生がいたと思われる。「学校」も始まったようだが，学生たちとハリスの思想的な対立があって，やがて解散することとなっていくのである。

ところで，長沢鼎にとっては，ブロクトンはまさに学校として機能した。どういうことかというと，エリー湖畔のブロクトンにはブドウ園があったのだ。彼が「ブドウ王」になっていくことを考えると，この時期にライフワークが決まったと言ってもよい。新生兄弟社には，農業のエキスパートであるジョナサン・レイとワインのエキスパートであるＪ・Ｗ・ハイド博士がいて，ワイン製造用のブドウを栽培しており，かなりの量のワインが生産され販売されていたようだ。そして長沢は，他のメンバーとともにしばしば農作業に携わった。彼は牛の世話などもしたが，こうした仕事にやりがいを感じ，特にブドウ栽培に関心を持ったと思われる。

考えてみると，学者の家柄に生まれ育った長沢が，ブドウという果物からワインという酒を作り出すというプロセスに強い関心を持つことはごく自然なことであったろう。もし藩に命じられて学ぶはずだった「造船」と実際に関わるようなことがあったならば，有能な造船技師になっていた可能性は高かったと思われるが，彼は運命的にワイン製造と出会ってしまったのである。

ハリスは薩摩藩英国留学生たちの向学心に打たれてアメリカに連れてきたが，彼らの敬愛の気持ちとひたむきさに触れて新生兄弟社の思想を世界に，特に日本に宣教するのに力になるだろうと期待した。長沢は年少だったので，ハリスを強く尊敬するようになったが，他の学生たちの考えとハリスの考えの矛盾がやがて表面化することになる。つまり，留学生たちは原則として藩から命じられた勉強を続けたかったのでハリスのコミューンでの厳しい労働に従事したわけだが，ハリスの考えでは労働そのものが聖務であるから，勉強は世俗的な欲求ということになってしまうのだ。この点をめぐっては学生たちの間でも議論が交わされたようだ。

そうした中でこうした議論を象徴するような決定的な事件が起こった。それは，鷲津尺魔の『長沢鼎翁伝』の中で「梁山伯員（りょうさんぱくいん）の論争」と題して紹介されているものである。ある日，客人も含めた複数による議論の中で，「若し日米戦わば何れに加担する乎」つまり「もし日本とアメリカが戦ったら，自分たちはどちらにつけばよいか」という論議になったのだ。これを問われたハリスは，日米に戦争は起こらないと確信するとしながらも「然し若しありとすれば我らは神の為に戦うべきである。・・・米国も日本も区別がない。唯神の命ずるところにより正義の為に戦うべきである」と答えたのである。

ハリスはこう答えるしかなかったのかもしれないが，学生たちは薩摩藩のためにひいては祖国日本のためにここに来ているはずであったから，不満を募らせた。そのためすぐに畠山，松

村，吉田など多くの日本人がブロクトンをあとにした。ただ，この時には森，鮫島，長沢はとどまった。1868年の５月のことだった。そしてこの直後ハリスは，森と鮫島に帰国を勧め，二人は６月初旬にブロクトンを発ってニューヨーク，パナマ経由で帰国した。この時をもってついに薩摩藩英国留学生はグループとしては消滅したわけで，長沢は19人のメンバーの中でただ一人異国に残り，残りの人生を自力で生きていくことになったのだ。

新生兄弟社を去った畠山，松村，吉田の３人は，ニュージャージー州のニューブランズウィックに向かい，1868年９月にこの地にあるラトガス大学に入学する。1869年に松村はアナポリス海軍兵学校に入学し，その後吉田はウィルブラム大学に入学した。畠山は，1870年までラトガスで学んだあと1871年の春に新政府より帰国を命じられて，10月28日にアメリカを離れてヨーロッパ経由で帰国の途に就いたが，パリで岩倉全権大使の要請があってアメリカに引き返して岩倉使節団に加わった。使節団とともにアメリカを発ってヨーロッパ視察のあと横浜に着いたのは1873年９月のことだった。

松村は長沢と並んで生涯変名を使用した留学生だが，その忠義心を裏付けるのが彼のアナポリス行きである。なぜなら藩から松村に課せられた専攻科目は「海軍」だったからだ。彼は1869年３月にアナポリス海軍兵学校に入学し1873年５月に卒業後に帰国して，すぐに海軍入りした。吉田は，1870年までラトガス大学で学んだあとはさらに銀行や保険などについて学んで，その後1871年に帰国して大蔵省に入った。なお，長沢と松村以外の４人は，クリスチャンになったり，キリスト教に強い影響を受けたりしている。

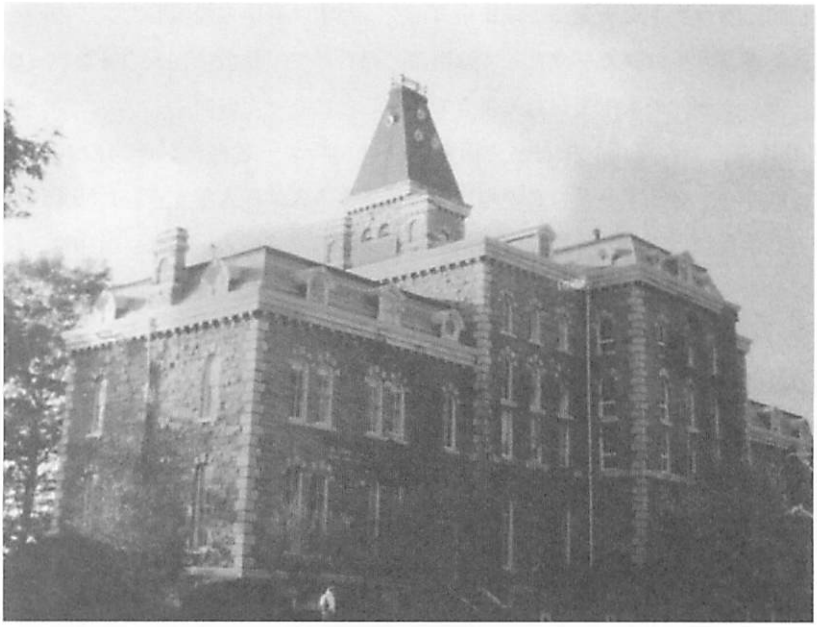
さて，一人になった長沢は，ハリスのもとを離れることなく農業労働と勉強に全力を尽くした。それは彼が1871年の１月１日から４月23日まで書きつづっていた日記（現物はいちき串木野市の薩摩藩英国留学生記念館にある）を見ればわかることである。なぜハリスのもとを去らなかったかということについては，いくつかの理由は考えられるだろう。まず，16歳の長沢にとっては自分の身の振り方を考えるにはやや若すぎるということがあったかもしれない。しかしそれ以上に大きかったのは，ハリスへの尊敬心と思慕であろう。

長沢はハリスが偉大な人物であると確信し，その言うことをすべて聞き，理解しようとした。しかし，また別の機会にくわしく触れることになろうが，長沢はクリスチャンにはなっていない。ハリスの説く道徳には影響を受けたが（それは彼の結婚観にも関わっている），それはあくまでもハリスへの強い敬意と父親にも重なる思慕であったと思われる。このことは日記の中でどれだけハリスの健康や精神状態のことを心配し心を痛めていたかを見れば，理解できよう。

４．長沢のアメリカ永住宣言

他の留学生たちが去った後も畠山や湯地（薩摩藩米国留学生のひとり）とは交通があったようだ。そして，どうやら松村，吉田，畠山が策を弄したためのようだが，1870年10月に博物学

の専攻学生としてニューヨーク州イサカにあるコーネル大学に入学した。



コーネル大学

しかし，長沢がやはり母親に抱くような思慕を寄せていて彼の世話をしたり相談役になったりしていた新生兄弟社のダビーおばさん（ジェーン・ウェアリング。のちにハリスの妻となる人物）の影響や助言があって，約３か月で，1871年１月に退学している。大学での勉強は世俗的なものという結論である。

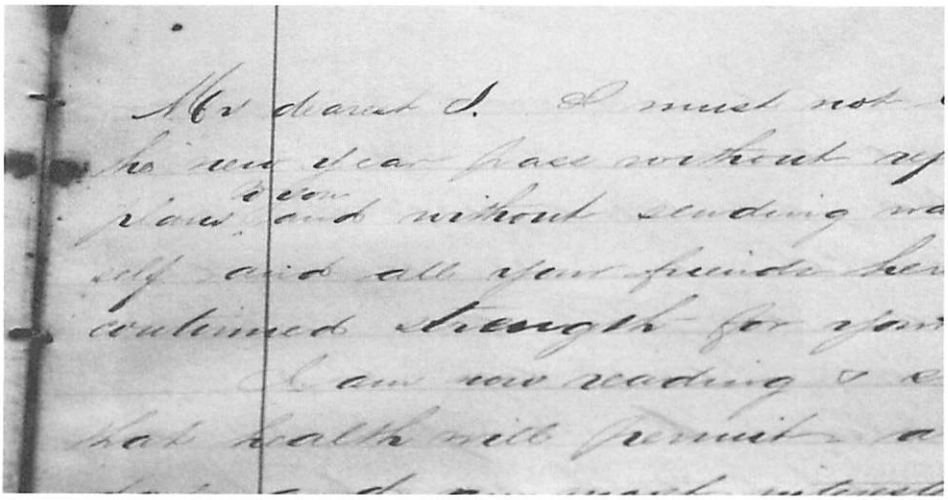
このころの長沢の苦悩は深かったであろう。彼が当時使っていた雑記用ノート（現物はやはり記念館にある）を見れば想像できる。そこには「プリズン（監獄），プリズン，・・・」と数限りなく一面に書かれているのである。それは当然といえば当然で，同じ薩摩藩英国留学生たちとのきずなと恩人でもあるハリスやその周りの人々とのつながりとの間で苦しみ，尊敬するハリスの信奉するキリスト教的思想と薩摩藩士として教え込まれてきた（神道や仏教ともかかわりの強い）武士道精神の間で苦しんだのである。

そして，長沢の生涯で最も大きな転機ともいえる事件が彼に訪れる。それは兄と慕っていた森との再会とアメリカ永住の宣言である。1868年に帰国後活発に行動していた森は，1870年11月にはアメリカ公使となり12月にはアメリカへ向けて出航し，1871年２月16日にサンフランシスコに到着した。彼が到着したとの知らせは２月24日に長沢のもとに届いている。ちなみに，この訪米時に森は24歳の仙台藩士新井奥邃（常之進）を伴って来ており，この新井は新生兄弟社に加入し，長沢とはカリフォルニアまで運命を共にすることになるのである。

長沢は，ハリスの許可を得て４月にワシントンに行き，公使として赴任していた森に会っている。長沢の日記の最後のページのすぐあとに彼が森に向けて書いた手紙の下書きがあるのだが，これは，森と会った時期と相前後している。筆者は，森と会った直後の手紙ではないかと考えている。それはともかく，この会談の中で森は，１年間の公務を終えて帰国する際に長沢を連れて帰る意向を長沢に示した。しかし長沢は「来年のことを言うと鬼が笑う。今すぐ帰れないなら，一生米国で暮らす」と言った。このため意見の一致を見ないまま長沢はブロクトンに戻ったのだ。

明治30年７月９日付の鹿児島新聞のインタビューや鷲津尺魔の『長沢鼎翁伝』によれば，この会談の折，帰国話は長沢の方が持ち出したことになっており，門田明は，長沢が迷っていて「日本に帰るか，アメリカに留るか，選択の決断を森の一言に賭けたのではなかろうか」と述べている。森が「来年」と言ったのは，まだ混乱の中にある祖国日本の状況を考慮した結果長沢に配慮してのことだろう。いずれにせよ，この会談が長沢に永住の決断をさせたことは確かであるが，彼は話の流れから思わず永住を口走ってしまったのではなかろうかとも思われるのである。「武士に二言なし」と言われる通り，長沢は，言ってしまった以上はあとへは引けなくなった可能性があるだろう。よく問題とされる「長沢はなぜ他の学生のように帰国しなかったのか？」という問いへの重要な答えの一つがここにある。

上記でも触れたように，この頃長沢は森に手紙を書いていて，その下書きが日記の最後に残っているが，この決断の直後の手紙ではないかと筆者は考えている。また，のちに詳しく述べるが，この手紙によれば長沢は祖国のことを心配し，自分もいつかは飛び出して実力を発揮するつもりだ，というようなことを書いている。森に対して，帰国も含めて今後の自分がこのままでいるつもりはないということをほのめかしているように思われる文面となっている。

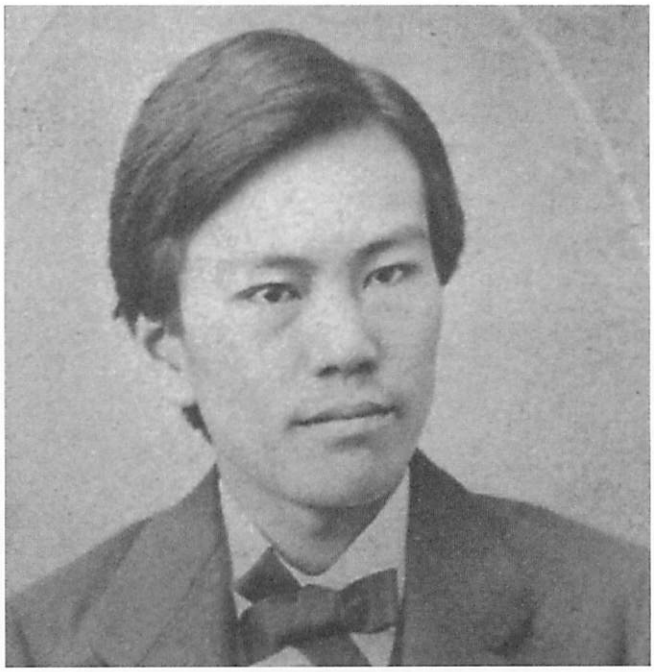


森宛ての手紙の下書き（薩摩藩英国留学生記念館保管）

吉田は一足先に帰国していたが，1873年に森が帰国しており，畠山も松村も同時期に帰国している。門田明は「この時が，サツマ・スチューデント計画の終結であった」と言っている。なお，同年12月には財政上の理由などで官費留学生全員の帰国が命じられ，ヨーロッパとアメリカにいた学生の多くが帰国したようだ。

ところで，長沢は，森に永住を宣言したころに普仏戦争（1870年７月～1871年５月）の視察のためにハリスとともにヨーロッパに出かけている。数か月を過ごしたあと秋にアメリカに帰国したようだ。これにより，長沢がイギリスやアメリカ以外の欧米の国も訪問していたことがわかる。

もうひとつ長沢をめぐる興味深い話がこのころ生まれている。それは長沢をめぐる唯一の恋愛話である。1872年１月15日にいわゆる岩倉使節団がサンフランシスコに到着したが，このころに森が長沢を使節一行に引き合わせ，その折に使節団に同行していた日本初の女子留学生のひとり山川捨松に出会い，長沢が彼女に好意を持った，というのである。しかしどうやらこれは事実ではないようで，鷲津尺魔の質問に対して長沢はこれを否定している。当時の彼はなかなかのよかにせであるので，そんな噂が立ったのかもしれない。



20歳代の長沢

長沢は生涯独身を通したので，この時にうまくいかなかったことがトラウマになったかのような説もあるようだが，おそらくそういうことはなかったであろう。

5．カリフォルニアへ

長沢が森にアメリカ永住を宣言したのが1871年，19歳の時であったが，彼はこの後23歳になるまで，つまり1875年まで，４年間一生懸命ハリスに尽くし労働に励んだのであった。そしてこの年（1875）に長沢の人生をさらに大きく左右し，彼にとって最後であり最上でもある土地を提供する事件が起こるのである。

実は，1860年代から1870年代にかけては，カリフォルニア州でワイン産業が急速に成長しつつあったのである。このことは全米に知られており，ブロクトンでブドウ園の経営にあたっていた人々も当然のことながらこれを読んだり聞いたりしていたわけだ。また，おりしも1869年には大陸横断鉄道が開通し，西部への現実的な移動が可能となっていた。

カリフォルニアは全米でも珍しく地中海性気候で，フランスのように温暖な気候であった。一年中雪は降らず，雨もめったに降らない。乾燥がかなり強いが，気温が極端に低いことも高いこともなく，日差しが強い。北カリフォルニアの土地はあまり肥沃ではないが，フルーツの栽培には適しているようで，ブドウ栽培にはうってつけの土地柄である。一方ニューヨークは冬の寒さも厳しく，天候の良い日もあまり多くない。そこでハリスは次第に，品質の良いブドウが育つようなもっと条件のよいところはないかと検討し始めた。

さらに，ローレンス・オリファントとの関係が悪化しつつあった。金銭上のトラブルもあってハリスは，ブロクトンに嫌気を感じたとも思われる。このころ長沢は，一人前のワインメーカーになったと自負していたので，ハリスが1875年初頭に，ブロクトンを離れカリフォルニアに新生兄弟社の新しい本拠を建設するという決定を下した時には，これを自身のチャンスととらえ，今まで学んだことが活かせる，自分の実力を発揮できると考えた。

そして1875年の２月中旬に，ハリスは信頼できて兄弟社に尽くしてくれると考えられるメンバーだけを慎重に選んだうえで，ミセス・リーカとその11歳の息子，長沢，新井と自分の５人だけでカリフォルニアへ向けて出発した。カーソン・シティーを経由してオークランドに着いた彼らは，サンフランシスコのコスモポリタンホテルに数日滞在したが，そのあと速やかにノースウエスタン・パシフィック鉄道で北カリフォルニアへと向かった。

文　献

犬塚孝明（1974，1981），『薩摩藩英国留学生』東京：中公文庫，中央公論社．

_____（1986）「翻刻　杉浦弘蔵ノート」『鹿児島県立短期大学地域研究所研究年報第15号』鹿児島：鹿児島県立短期大学．

_____（1987），『明治維新対外関係史研究』東京：吉川弘文館．

_____（2007），「1866　慶応二年　薩摩藩英国留学生」『世界を見た幕末維新の英傑たち　咸臨丸から岩倉使節団まで』東京：新人物往来社．

門田明（1991），『若き薩摩の群像』鹿児島：高城書房．

門田明，テリー・ジョーンズ，（1983）『カリフォルニアの士魂――薩摩留学生・長沢鼎小伝』東京：本邦

書籍.
上坂昇（2017），『カリフォルニアのワイン王　薩摩藩士・長沢鼎―宗教コロニーに一流ワイナリーを築いた男』東京：明石書店.
森孝晴（2014），『ジャック・ロンドンと鹿児島』鹿児島：高城書房.
森孝晴，三木靖（2016），『鹿児島歴史の旅―島津藩政と「薩摩藩英国留学生」―』（平成27年度特別講演会・かごしま県民大学中央センター連携講座解説冊子）鹿児島：鹿児島城西ロータリークラブ・鹿児島国際大学
長沢鼎常設展示室所蔵資料（鹿児島国際大学内）
志茂田景樹（2008），『蒼翼の獅子たち』東京：河出書房新社.
多胡吉郎（2012），『海を越え，地に熟し　長沢鼎　ブドウ王になったラスト・サムライ』東京：現代書館.
鷲津尺魔（1933），『長沢鼎翁伝』：鹿児島国際大学蔵
渡辺正清（2013），『評伝　長沢鼎　カリフォルニア・ワインに生きた薩摩の士』鹿児島：南日本開発センター.